

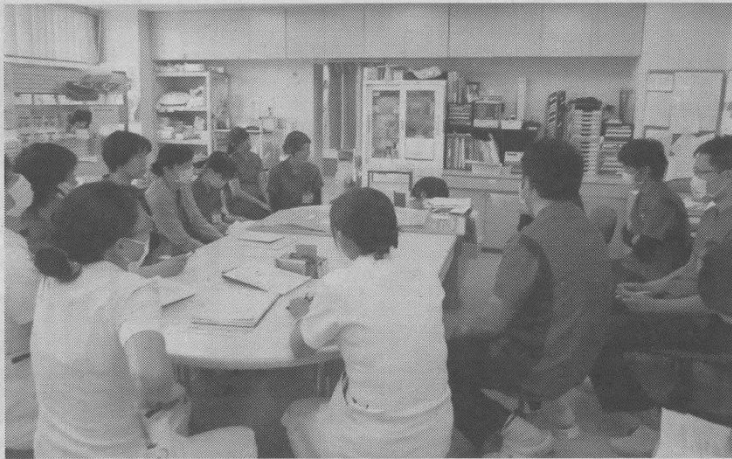
情報収集シート活用

札幌ひばりが丘

地域包括ケア病棟

多職種協働を推進

厚別区の札幌ひばりが丘病院（高橋大質理事長・176床）は、地域包括ケア病床の運用を開始して1年6カ月余りが経過。独自の情報収集シートを活用することで、個別性の高いケア実践とともに、医師、看護師、リハビリ職、MSW、事務職の多職種協働がさらに密になり、入退院支援、地域連携に大きな役割を發揮している。



カンファレンスを大事に多職種情報共有している

同病院は一般、医療療養、緩和ケアの病棟編成。亜急性期入院医療管理料の廃止に伴い、2014年10月から12床を地域包括ケア入院医療管理料1に移行、その後20床、28床と増床。今年3月からは39床とし入院料1で算定している。

住み慣れた地域で安心して療養生活が送れるように、道内で数少ない機能強化型在宅療養支援病院を届け出て、急性期治療後や介護施設などからの急変時患者受け入れのほか、在宅医療にも力を入れている。

運用に当たって大きな（洋式・和式）、洗面台・

脱衣所、浴室内の状況をはしめ、退院後心配なこと、介護保険利用、住宅改修予定等を記入。そのほか家族情報として同居者数、使用寝具、食事の調理者、買い物の交通手段、医療機関までの所要時間、退院に向けて本人、家族それぞれの希望なども書き込むようにしている。

連携密度向上が鍵

同病棟は急性期病院を退院した骨折やけがなどの整形外科疾患患者や後期高齢患者が多いため、入院早期から在宅生活のイメージを持って、多職種が連携できるような体制を整備。鍛谷よし江看護師長は、入院前の生活状況、ADLの確認、本人、家族の思いを把握して、安心して在宅生活ができるよう、必要なサービスへつなぎサポートしているという。

月平均の患者数は25、33人。平均在院日数は22日、在宅復帰率は83%で推移。ここ直近3カ月のリハビリ単位数は2・57となっている。地域医療機関とのパイプを太くし、さらに連携を進めていくのに伴い、同病棟は「病棟で受け入れられる患者の見極めがより必要になり、多職種による連携密度の向上が鍵になる」としている。

会長選で2候補表明